

真摯に向き合い「山格」みる

昭和39年
(1964年)

明治

大正

昭和

平成

日本百名山

すくららぶらぶら

ANOTOKI

SOREKANA



連載完結まで23年

深田久弥が「百名山」を着想したのは戦前で、1940年、雑誌「山小屋」に「日本百名山」のタイトルで、20の山を10回連載した。37年、朝日新聞に小説「鎌倉夫人」を連載し、新進作家として認められた時期だった。高辻謙輔さんによると、43年にも「文学界」に「日本の名山」と題する連載を始めるが、3回で終了する。「名山について、まとめようと模索していた様子がかかかわれる」と高辻さんは語る。「山と高原」の中断から、戦後、「山と高原」で連載が完結するまで23年かかった。「日本百名山」は新潮社と朝日新聞社から出版され、新潮社版だけで累計64万4千部売れている。

雲に包まれた利尻岳山頂に立つと、北海道・利尻島の真ん中にあることも、1700メートルの高さも忘れてしまう。

5時間かけて登り詰めた十数人が頂の看板と祠の横で、写真を撮っていた。東京都青梅市の68歳と65歳の夫妻は、50年近くかけて「日本百名山」の90を越す峰々を踏破してきた。妻は「百名山一つ一つの文章と同じように、山には味わいがあり、登頂時の達成感是最良の思い出です」。

作家深田久弥(1903、71)の著書「日本百名山」は、1964(昭和39)年新潮社から刊行された。その4年前に、深田は利尻岳の頂を踏んだ。そのときも、「海洋の気流が頂上につつかって……絶えず湧かせている雲」に山頂は覆われた。

その姿勢は百名山を選ぶ時にも表れた。「日本百名山」の「後記」で、三つの選定基準を明かす。第1は山の「品格」。「人間にも人格の高下があるように、山にもそれがある」と記し、「山格のある山でなければならぬ」。第2に山の「歴史」。三つ目は「個性」で、「顕著なものが注目されるのは芸術作品と同様である」と述べる。そして、筑波山と開聞岳を除いて1500メートル以上の山に限られる条件を加えた。

背景に、山の紀行文を書きながら練り上げた」とみる。刊行された「日本百名山」は当初、山岳関係者よりも文学者の評価が高かった。深田と旧知の小説家林房雄は、64年11月、朝日新聞の文藝時評に「正確簡潔、無償の歓喜に満ちた文章で百名山を描いた」と書き、「不朽の文学」と絶賛した。

三角点は明治以降、地図を作る基準に、先人たちが苦労して頂上などに設けた。その足跡をしるばせ、人と山とのつながりを表している。「人の姿を重ねるように、山と真摯に向き合う深田さんの姿勢は最後まで変わらなかった」

その姿勢は百名山を選ぶ時にも表れた。「日本百名山」の「後記」で、三つの選定基準を明かす。第1は山の「品格」。「人間にも人格の高下があるように、山にもそれがある」と記し、「山格のある山でなければならぬ」。第2に山の「歴史」。三つ目は「個性」で、「顕著なものが注目されるのは芸術作品と同様である」と述べる。そして、筑波山と開聞岳を除いて1500メートル以上の山に限られる条件を加えた。

選考委員の文芸評論家小林秀雄は「山格について一応自信がある批評的言辭を得るのに、著者は五十年の経験要した。文章の秀逸は、そこからきている」と評した。

そんな「日本百名山」が80年代、大きく脚光を浴びる。中高年の登山ブームで、各地の百名山にはどっと登山客が押しかけるようになる。登るべき山の「指標」とされたからだ。35年かけて100の頂を制覇する旅行会社の団体ツアーが拍車をかけた。利尻岳は2000年に登山者が年間1万5千人に達し、以来、携帯トイレの使用を呼びかけていた。崩れやすい火山地質や雪、雨水に加え、入山者の踏み込みで登山道が荒れ、10年前から補修が続く。

「日本人は、日本百名山の『目次』だけの登山から卒業し、山の登り方を考えるべきではないか」。『日本百名山』の編集者大森久雄さんは、そんな「日本百名山」が80年代、大きく脚光を浴びる。中高年の登山ブームで、各地の百名山にはどっと登山客が押しかけるようになる。登るべき山の「指標」とされたからだ。35年かけて100の頂を制覇する旅行会社の団体ツアーが拍車をかけた。利尻岳は2000年に登山者が年間1万5千人に達し、以来、携帯トイレの使用を呼びかけていた。崩れやすい火山地質や雪、雨水に加え、入山者の踏み込みで登山道が荒れ、10年前から補修が続く。

その姿勢は百名山を選ぶ時にも表れた。「日本百名山」の「後記」で、三つの選定基準を明かす。第1は山の「品格」。「人間にも人格の高下があるように、山にもそれがある」と記し、「山格のある山でなければならぬ」。第2に山の「歴史」。三つ目は「個性」で、「顕著なものが注目されるのは芸術作品と同様である」と述べる。そして、筑波山と開聞岳を除いて1500メートル以上の山に限られる条件を加えた。

選考委員の文芸評論家小林秀雄は「山格について一応自信がある批評的言辭を得るのに、著者は五十年の経験要した。文章の秀逸は、そこからきている」と評した。

そんな「日本百名山」が80年代、大きく脚光を浴びる。中高年の登山ブームで、各地の百名山にはどっと登山客が押しかけるようになる。登るべき山の「指標」とされたからだ。35年かけて100の頂を制覇する旅行会社の団体ツアーが拍車をかけた。利尻岳は2000年に登山者が年間1万5千人に達し、以来、携帯トイレの使用を呼びかけていた。崩れやすい火山地質や雪、雨水に加え、入山者の踏み込みで登山道が荒れ、10年前から補修が続く。

そんな「日本百名山」が80年代、大きく脚光を浴びる。中高年の登山ブームで、各地の百名山にはどっと登山客が押しかけるようになる。登るべき山の「指標」とされたからだ。35年かけて100の頂を制覇する旅行会社の団体ツアーが拍車をかけた。利尻岳は2000年に登山者が年間1万5千人に達し、以来、携帯トイレの使用を呼びかけていた。崩れやすい火山地質や雪、雨水に加え、入山者の踏み込みで登山道が荒れ、10年前から補修が続く。

そんな「日本百名山」が80年代、大きく脚光を浴びる。中高年の登山ブームで、各地の百名山にはどっと登山客が押しかけるようになる。登るべき山の「指標」とされたからだ。35年かけて100の頂を制覇する旅行会社の団体ツアーが拍車をかけた。利尻岳は2000年に登山者が年間1万5千人に達し、以来、携帯トイレの使用を呼びかけていた。崩れやすい火山地質や雪、雨水に加え、入山者の踏み込みで登山道が荒れ、10年前から補修が続く。



⑤日本百名山の北アルプス・笠ヶ岳山頂での深田久弥(左)と画家山川勇一郎=1957年ごろ、「深田久弥 山の文化館」提供 ⑥(右)も ⑦頂の雲がとれた利尻岳 ⑧日本百名山「穂高岳」の原稿

日本百名山
その十九 穂高岳
穂高岳は昔、野山にまぎらな、空を、
とて、
奥山もつたから、
し、
と、

幅と奥行きのある文学



大森久雄さん(81)

「日本百名山」の編集者

私が「日本百名山」を編集することになったのは、1958年に「別冊文芸春秋」に掲載された深田久弥さんのエッセー「混まない名山」を読んだのがきっかけです。そこには「日本百名山を選んでみよう」という考えが記されていました。私は25歳で、出版社「朋文堂」の月刊誌「山と高原」の編集者でした。深田さんは小説家であり山の経験も豊富。二つを融合すれば、いいものが出来ると考えました。

「山と高原」59年3月号から毎月2山ずつ、4年2カ月にわたって連載しました。1山400字詰め原稿用紙5枚の分量。内容が充実し評判がよく、もう少し長く書いてほしいと深田さんに頼みました。すると「これ以上長いと文章がだれる」と即座に断られました。

深田さんは選筆で有名でした。文献を調べ、文章を練り、たいへんなエネルギーをかけていたのだと思います。あす印刷というのに、原稿が入らない。頭の中が真っ白になりましたが、奥さんは「明日来て下さい。必ず渡します」と言います。奥さんが原稿の進み具合をつかんでいたのです。休載は一度もありませんでした。

「日本百名山」は羅列的な記録ではなく、深田さんの山歩き幅と奥行きが独自の世界をつくり、文学として結実したものです。山を一步一歩踏みしめるように、読者のみなさんは「日本百名山」の世界をかみ締めてほしい。

◇次回は「省エネルギー登場」の予定です。